

「居心地」誕生

第七回

ひとの、住まいにかける「思い」を出発点にして、「居心地」に導かれ、場所や手作りの思いを除いた「こころの領分」こそ「居心地」だと、まず考えられた。

ところが「居心地」の核をなす「心地」は、「こころ」と対比される伝統があるのだ、とわかってくると、「こころの領分」ではなく、「心地の領分」にすべしとなってきた。

「心地（こち）」は古くからの日本語にある（ただし、仏教語として「心地（しんち）」もあった）。

かわれた。意味としては「居心地」にちかく、場所や地位の居やすさ・居にくさの気持ちさをさす。

同年の有名なところでは、田山花袋の『蒲団』（明治四十年）があり、ここには「居心地」は出てこないかわりに、「居心」（いごころ）が一度だけ登場する（ただし田山花袋の明治四十一年の長い小説『生』に「居心地」があらわれ、これが二番目であるようだ）。先生を慕って上京し勉強しようとする芳子に、先生の時雄は自宅に彼女のための部屋をあてがい、まず一室を整える、

「どうです、こころも居心は悪くないでせう」

と時雄が得意そうに笑う。

「居心」（いごころ）というのと、先の対比でみれば、「心地」側の受動性ではなく、「こころ」側の積極性がまだあるといえるのかもしれない。

もうひとつ、このこころの「こころ」

「居心地」はそれに比べればはるかに新しい。

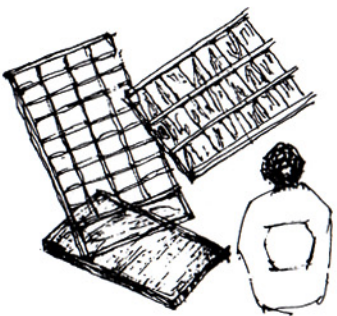
さらに、言葉からの手がかりを探る。文献で残るのは、文学でみるのがよさそうである（古く「居心地」という言葉が文学以外の文献にあらわれる、というのは通常考えられない）。

明治期後半のいわゆる近代文学、特に小説分野ではじめて「居心地」に出会う。

最初は、明治四十年の国木田独歩の短編小説、『疲労』であるようだ。

京橋の旅館に疲れきった主人がいる。

え・安原喜秀



側の言葉として、よく用いられたのが「心持（こころもち）、あるいは心持ち」である。文豪夏目漱石は、この「心持」がとても気に入っているようで、「心地」のほうよりも、「心持」を多用することによって、「こころ」の

二階で、客の友人と二人で仕事がらみでもう一人の友人と待ち合わせていた。そのひとが二人の留守の間に来て帰ってしまったことがわかり、呼ぶことにするのだが、二人で当人の宿の噂をする。一方が「しみつたれた宿なのに、よく辛抱してそこをつかうね」というと相棒が、

「定旅宿（じやうりょくど）となると矢張居心地（やばい）が可いからサ」

とこたえる。この場合「居心地」は「定旅宿」という具体的な場所であり、その空間の心地である。

このころ漢字はルビのふられていることも多かった。けれども、その「居心地」にはルビはふられていない。どうも「居心地」が先につくられて、仮名の「いごち」はあとから出てきたようだ。それを裏付けることがある

江戸時代の後期ごろから「居心」（いごころ）という言葉がみられる。したがって明治期でも、「居心」はつ

意向の積極性が知らず知らず出ているのかもしれない。

「こち」よりは「こころもち」としての漢字にした新しさ、もあったのであろうか。

ただし、『三四郎』（明治四十一年）にだけ一度、「居心地」が出てくる。

つまりは、「心地」は古くからある言葉である。

そして「居心地」よりは「居心」が先にあった。

とすると、どうやら「居心」と「心地」が結合して、漢字の「居心地」が誕生したのではないか。

「こころ」側と「心地」側の結合である。

そうして平仮名の「いごち」はそれにあてられる。このほうは「いごころ」と「こころもち」が結合して「いごち」という音ができてきたのかもしれない。これも研究の余地がある。